

報告「第4回風と雲の広場 みんなの科学教室～作って・試して」

2009年第4回の「風と雲の広場」も無事終了することができました。これも有形、無形に私たちの活動を支えて下さっている皆様のおかげです。また、いちいちお名前を挙げることは差し控えさせていただきますが、「実験」や「実演」を指導していただいた方々、実際に出演していただいた方々、何度も大河原駅と小学校間を車で送迎していただいた方々、裏方に徹してテントやバーベキューの準備や受付にまわっていただいた方々、猪や鹿の肉や地元の食材を調達してくれ方々など、地元の方々をはじめとして、この活動を盛り上げようとしてくれたすべての方々にあらためて感謝する次第です。

今回は150人を越える多数の方々に参加してくれました。参加してくれた人々もよちよち歩きの赤ちゃんから年配の方まで多彩な人々で、みんながそれぞれの仕方で楽しんでくれたように思います（子犬のパピヨンも飛び入り参加していました）。また、今回は参加者の地域的な拡がりを見たことも大きな特徴のひとつです。京都、奈良、三重、大阪はもちろんのこと、遠く北海道や横浜市、敦賀市などからはるばる駆けつけてくれた方もいらっしゃいました。初参加の人も少なくありませんでしたが、広報誌『風と雲の便り』を愛読してくれているひとも多く、あらかじめ分かってくれていたのでしょうか、スムーズに輪の中に溶け込んで戸惑う人があまりいないことも印象的でした。



視覚はもちろんですが、聴覚（ジャズライブ Smile Brunch Orchestra、京炎そでふれ「京京前線」、落語「馬鹿頭（ばかず）の会」）、味覚（クッキー、バーベキュー）、嗅覚（ハーブ・緑茶の石鹸やお菓子）、触覚（マイナス200度の氷に触れる実験）などの感覚をフルにつかったそれぞれのプログラムは、いかがでしたでしょうか。手を使って実際に望遠鏡を作ってみることは、氷に触れる実験もそうですが、危険を伴わないというわけではありません。ともすれば安全な場において「見ること」だけが、唯一の真理であるかのような錯覚にとらわれる私たちの日常生活を少しばかり見直すきっかけにさせていただければ、主催者の意図は果たされたことになります。また特別プログラムとして、地元の方のご好意で、合気道の演武も披露していただきました。戦ったり、競争したりする世界だけが人生や生活ではないこと、人と人がつながって〈氣〉をあわすことも、また

私たちが元気づけてくれるものだということ、合気道の演武は教えてくれているように思います。

残念なことは、天候が不順なため、星を眺める機会がなかったこととジャズや「京炎そでふれ」の踊りは体育館で行わざるを得なかったことです。でもこれは、次回の楽しみのために取っておくことにします。

今回参加してくれた人はもちろんのこと、何らかの理由で参加できなかった人も、次回は今回以上の魅力あるプログラムを企画するつもりでいますので、どうぞ引き続き、長いお付き合いをよろしくお願いいたします。

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科
TEL：075-753-3075, URL： <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/>

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄／副会長 西村秀俊



風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.13

「七歳までは神のうち」
子どもについて昔からよく言われる言葉である。

昔は、乳幼児の死亡率が高かったから授かった赤ちゃんが、なんとか天に召されることがないように、そして人間の世界のなかで自立して生きる力を付けられるようにとの配慮からだったのだろう、子捨ての振りをしたり、わざとお古の着物を着せたり、「お捨て」「捨て丸」などの幼名を付けたりしたこともあったという。七五三のお宮参りもまた、このような儀礼の名残りであろう。

人が生まれて、生活し、死んでいくのは自然の過程だけれども他の動物と違うのは、そこに〈意味〉を見出していくことだ。そして、誕生や死のなかに意味を見出すことによって人生に濃淡の彩を添えることができるのだ。



星を観る

30cm反射式望遠鏡で迫力の天体観測！
自分だけの望遠鏡（組立キット）も作ろう

第4回 風と雲の広場

みんなの科学教室

～作って・試して～

7月25日(土) 12時～20時

南山城村 野殿童仙房小学校

子どもおとも楽しく学べる体験学習！ 夏休みの自由研究にも！

緑を匂う

畑でとれたての香りを楽しむハーブ&緑茶教室
オリジナルのお茶・せっけん・クッキーを作る

旬を味わう

トマトなど地元の食材を食べよう！
ご飯・豚汁・バーベキューを自炊します

風を聴く

みんなで持ち寄り交換！ 「チャオ」の市場
出店やジャズカフェ、太鼓教室も開催

12時半～ 氷に触る（理科実験）／緑を匂う（ハーブ教室）
3時半～ 星を観る（望遠鏡づくり）／旬を味わう（料理）
7時～ 星を聴く（星空観望会・予定） 親子で宿泊可能
※観望機作りに参加される方は事前に連絡ください（材料費2千円）
当日JRI臨時本編・大河原駅より無料送迎あり

連絡先 京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーションセンター
kyoshide@educ.kyoto-u.ac.jp 075-753-3075 (担当・吉田)

氷に触る

江角先生の不思議で楽しい実験
液体窒素で何でも凍るマイナス196度の世界

主催 野殿童仙房生涯学習推進委員会

2010年二月二日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター
「教育空間創造ユニット」
編集：前平泰志
編集協力：吉田正純
制作：(株)松籟社

ひとを見送るということ

——童仙房における葬送儀礼

2008年、大学院生が主体になって課題を作って、探究するという「研究開発コロキウム」という企画がありました。これは、その一環として、提出された成果のひとつです。児玉は土葬による葬送儀礼について、4つの組の住民と泥湊寺代務住職のあわせて11人への聞き取り調査を行ない『コロキウム報告書』にまとめています。童仙房地域では2002年4月にはじめて火葬が行なわれて以降、従来の土葬から火葬へと変わりつつあります。「組」という10軒程を一つの単位とする地域組織による葬儀の仕方は、仔細にみればその形態や内容において、組によっても、家によっても異なります。したがって、以下の聞き書きは、彼女の聞き取りの範囲内で理解したものに限定されていることをお断りしておきます。このような厳粛な「出来事」を快く話していただき、また公にすることを許していただいた地域の人の寛大さに心から感謝申し上げます。

葬儀の「段取り」

童仙房地域で生きてきた人が亡くなると、まず喪主は親族へ連絡し、通夜・葬式についての相談を行ない、次いで当組長と導師へ連絡、組長は組人へ連絡を回します。この日に、死者に対して末期の水の儀式を行ない、葬儀宅の神棚を半紙にて封印をし、地域の人たちは、喪主宅にお悔やみに伺います。夜になると、組長宅に当組の組人が、1軒につき男女1名ずつ、葬送儀礼の手伝いに集まります。組長が葬儀委員長を担い、組人に役割を采配する「段取り」を行ないます。

翌朝、組人は午前9時～10時頃に集合し、男女に分かれて通夜と葬式の準備を行ないます。男性の組人は通夜と葬式に用いる小物や御棺を作成し、祭壇を組み立て、供物を供えます。御棺は基本的に寝棺であり、杉や檜の板と釘を用いて作成するか、製材所に注文しました。小物とは、香炉や香炉台、提灯、団子や四花、墓標、位牌などです。そのほか櫛や竹を山へ切りに出かけ、必要な用品を町へ買いに出かけます。また、男性の組人は近隣町の寺に導師を迎えに行きます。これらは必ず2名で行なうことになっています。

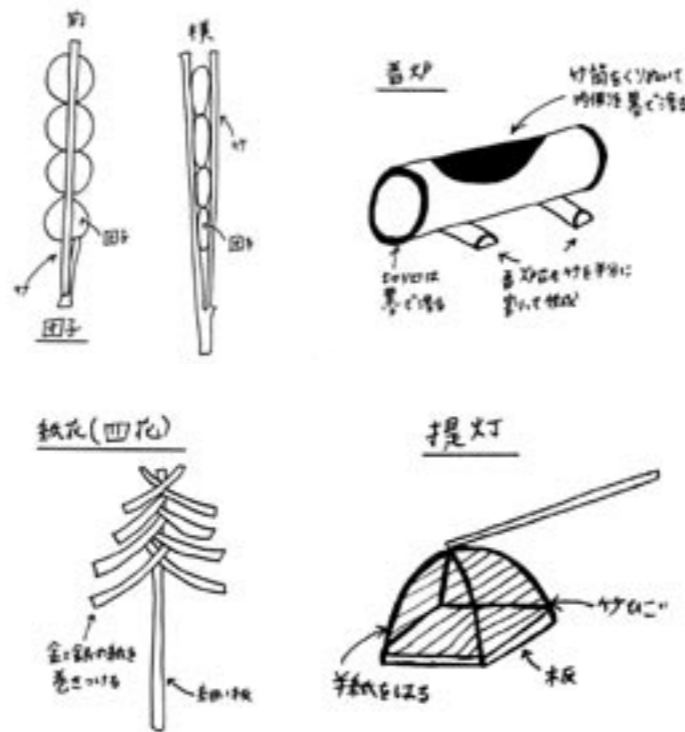
女性の組人は食事や部屋の片付けなどを行ないます。メニューは7～10種類で、それらを鉢盛りにして長膳に並べ、各自がとって食べるスタイルをとります。

通夜では導師が枕経をおこない、親族は逆さ水で湯灌を行い、野辺送りの際の位牌や櫛などの持ち主を決めたり、導師の送りを行ないます。

お墓を掘る

出棺時間が午後1時ならば、組人は各戸男女1名ずつ、午前11時半頃から手伝いに出ます。墓掘り人は、午前8時半頃に集合し、御棺のサイズを確認し、墓を掘る場所を喪主に聞きます。墓掘り人は、「おんぼさん」、「穴掘りさん」などと呼ばれ、順番制の組もあります。墓掘りは4人か6人で、必ず偶数で行かねばならず、妻が妊娠している者は、はずされるという組もあります。経験者は未経験者を連れて行き、掘り方を教えます。C氏は「組のなかでもお葬儀に関係のない人が墓掘り人の役割をおおせつかさどる」そうです。なお、火葬の場合も遺骨を埋葬するための墓穴を掘ります。葬儀では、業者が入らない場合は組長が葬式の司会進行役を務め、導師が読経と短い話をします。

こだまかな
児玉華奈 Kana KODAMA
元京都大学院生



(B氏のメモを元に筆者が描いたもの)

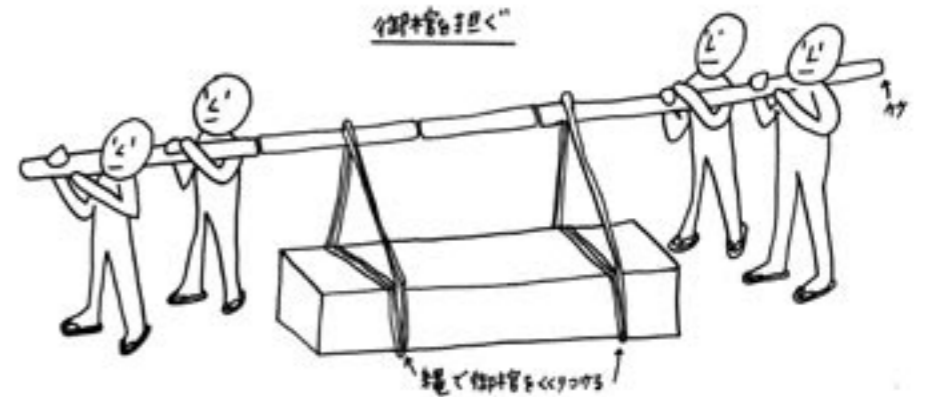
野辺送り

出棺に際して、組人は親族とともに御棺のふたを釘で打つのを手伝います。野辺送りでは御棺を運ぶため、荒縄で担い、竹に御棺を吊り下げます。葬列は先頭鐘・墓標・お供物・導師の大傘などに続き、御棺と遺影が運ばれ、その後を会葬者が歩きます。担ぎ手は男孫で、前から順に血縁の近い者が担ぎます。足元は必ず草鞋を履きます。

A氏によると、鼻緒に白い半紙を巻きつけるそうです。また、御棺の担ぎ手は草履を「持って帰ることによってその人が長生きできる」といういわれがあるといえます(B氏)。埋葬時は、墓穴のふちには杉かヒノキの葉を並べ、御棺の上にはほうりこみ、一緒に埋めます。墓から100mほど離れた焼香場が形式上、親族が参列する最終地点で、ここで導師が読経を行います。

そこから御棺は墓掘り人が担ぎ、縄を解いて御棺を墓穴に下ろしていきます。初めに喪主が少し土を被せますが、その後は墓掘り人がスコップを持って待機

しており、土をかぶせ埋めます。墓掘り人は道具をそのまま墓場に置いて帰り、酒宴の席へ向かいます。墓掘り人が帰って来て、席に着くと、お礼と供養の酒宴が始まります。お酒は一番先に墓掘り人につがれます。出席者は墓掘り人が料理に箸をつけるまで、料理を食べるはなりません。帰り際も、親族は墓掘り人が腰を上げるまで帰ってはならないことになっています。



葬送儀礼とはどんな場か

まず、組人にとっては、葬儀の手伝いについての感想は、おおむね「大変」だといえます。しかし、「大変」だと感じながらも、この土地に生きる者である以上、葬儀の準備を共同で取り組むことを自然のこととして受け入れている風にも思われます。組人としての手伝いは、自分自身を童仙房の土地に生きる者として受け入れていくことなみでもあるのではないのでしょうか。

一方、親族としてはどうでしょうか。童仙房の葬送儀礼において、親族が葬儀の過程で重要な役割を担うのは「御棺を担ぐ」という場面に集約されていると思われます。自分が死者との血縁関係があるからこそ、担ぐことができ、また遺体の重さは、担いだ本人しか分かりません。C氏は「自分の手で重い〔御棺を〕担いでいったっていう、やっぱりおじいちゃん重かったんやっていうのとかね、そういうのってね、担いでってやった人しか知らないわけですよ。そういうのがやっぱり価値が高いわけですよ」と話しています。また土葬の場合、担いでいったままの重い身体が埋葬され、遺体はやがて土に返ってゆきます。

